

精神薄弱児教育をとりまく問題に関する一調査研究

富 安 玲 子

I 問 題

精神薄弱児の教育を促進させるためには、精神薄弱児自身の発達心理や学習過程の特性を究明し、彼らに対する適切な教育や治療の方法を見出すことが重要であり、それと共に彼らを受け入れる側あるいは周囲のものたちの理解啓蒙を計ることも忘れてはならない点である。精神薄弱児への関心も次第に高まり、この領域での研究も多く行なわれているが、その方向としては、前者に関しての努力がより多く重ねられ、後者に関しては、精神薄弱児をもつ親及び一般の父兄、教師を含む一般社会人の意識、態度についての若干の調査が見受けられるが、まだまだその現実の姿さえも把握されていない現状である。

精神薄弱児教育の最終的な目標が彼らに社会への適応の道を開くことだと考えるならば現在、特殊学級という学校の中の場で教育されている精神薄弱児たちが、将来、社会の中でどのように役割を演じるかという問題は、彼らが学校の中でどのような役割を演じているかという問題に連なっていくと考えられる。将来、この特殊学級の生徒たちが担任教師や親の手から離れて生活しなければならなくなったときに、共にこの社会で生活していく相手となる普通学級生徒や、学校全体の雰囲気をつくるのに影響の大きい普通学級教師など全校の理解によって支持されているかどうかということが、その学級担任のいかんもさることながら、特殊学級の教育の成功か否かの鍵となる決定的な要素だと考えられているのである。

特殊学級の設置が急がれ、その教育の効果が問題となる場合、多くは普通教育の中での精神薄弱児の教育の効果との比較においてなされてきた。しかし、実際には、その特殊学級も、いろいろの条件のもとで、それぞれ異なった性質をもち、従って、その効果も必ずしも一様ではないと考えられ、現に「あそこの学級はうまくいっている」とか「あまりうまくいっていない」とか言う評判を耳にする。担任教師の問題は一応置いて、これらの評判のような、所謂「うまくいっている」学級と「うまくいっていない」学級をもつ学校では、学校全体の支持はどのようになっているであろうか。好ましい態度がもたれているであろうか、などについて、普通学級の生徒及び教師の側から、何らかの関係が見出されないか、そ

の手がかりを掴むことを問題としたい。

II 調査—I

まず、「うまくいっている」と言われている特殊学級をもつ中学校を3校、「うまくいっていない」と言われている特殊学級をもつ中学校を3校選択し、各校2年生約100名の普通学級生徒に対して、特殊学級生徒の識名度、実際の場面における接触度、及び、精神薄弱児に対する理解のしかた（自由記述）についての調査を行なった。その結果、(1)識名度や接触度については、学校によってかなりの差がみられたが、必ずしも二つの性格の特殊学級との間に関連は認められなかった。(2)理解のしかたを好意—非好意的の次元で眺めると、「うまくいっている」学級を囲む普通学級生徒には好意的が多く、「うまくいっていない」学級を囲む普通学級生徒には非好意的な反応が多かった。(3)反応としては、好意的、非好意的なものも多くとも、学校により、かなりの無関心型の生徒がいる。そこでこの好意—非好意的の関連をもう少し深く検討するために、識名度、接触度ともに高い、K中を「うまくいっている」群の代表校、D中を「うまくいっていない」群の代表校として取りあげてみることにする。

III K中、D中の概要（省略）

IV 調査—II

調査—Iにおける自由記述の中から、相対すると思われる特徴を24項目、ある一つの特徴を「よく言えば」「悪く言えば」の両面からあげていると思われる13項目を項目分析の結果選択し、SD法に似た方法で特徴をチェックさせる二種の質問紙を用いることとした。従って、精神薄弱児に対する態度を「好意—非好意的」という次元で考えることを基本的な基準として、K中、D中間の差を見ることを目的に、両校1、2、3年生各学年約100名の普通学級生徒に調査を行なった。その結果、(1)二種の質問紙は同じ傾向を示し、K中においては各学年を通じて好意的、D中においては、3年にひとつの質問紙に僅かな好意的反応が現れた以外はすべて非好意的反応が示された。従って、両校間には0.1%水準で有意差が認められ、K中がより好意的態度をもっていることが伺われた。(2)K中においては学年間に差は認められなかったが、D中においては、2年生が最も非好意的で、

1年生がこれに続いていた。(3)男女差については、K中では女子の方がより好意的な傾向が伺えるが、D中では2, 3年生になると女子の方がより非好意的な傾向が伺えた。

V 調査—III

調査I IIに現われた普通学級生徒の精神薄弱児に対する態度への影響因として、また、直接特殊学級への影響も大きい教師の精神薄弱児の現解のしかたやその教育のあり方についての考え方、及び、特殊学級に対して積極的意義を認め、指導に関与していこうとしているか否かについての考え方を知ることと、合せて、教師の間での特殊学級が「うまくいっているか」否かの評価や評判、自分の学校の特殊学級の教育効果の評価を知ることを目的に準郵送法を用い、K中、D中の教師に調査を行なった。学校名は伏せ、無記名であることを、調査の際には、原則とした。その結果、(1)回収率はK中74%D中93%をあげ、この種の問題への関心が低いとは言えない。(2)精神薄弱児に関しては、正しい理解を示しており、その教育を志す姿も望ましい方向を向いており、K中、D中の教師の間には全く差が認められない。(3)特殊学級に関しては、校内の位置について、K中ではみんなの目かとどき指導しやすい中心的位置がよいとする教師が多く、D中の教師よりも、その考え方をするものが多い。逆に、普通学級への影響やら彼ら自身も目立たぬことを望むであろうから周辺的位置がよいとする教師がK中に少ない。また、普通学級との関係について、よい影響を与えると言え、積極的に言える教師はK中に多く悪い影響を与えると言え教師はD中に多い。その他、指導面、行事への参加、啓蒙についての考え方には差は認められなかったが、精神薄弱児の実際の教育の場である特殊学級という現実の問題となると、K中D中間に若干の差が認められるようになり、項目の構成から言って、K中に特殊学級の意義を認め、共に指導に関与していこうという態度が伺われる教師がより多いと言えらるであろう。(4)教師の間でもK中が「うまくいっている」特殊学級をもっと考えられていると言えらる。(5)K中には特殊学級について評価を下せるなどの判断可能な教師がD中より多く、これが精神薄弱児や特殊学級についての考え方とも関係し、判断可能な教師はより望ましい態度をもっていることがわかった。(6)絶対評価であるが、自分の学校の特殊学級の評価は、良い性格の精神薄弱児づくり、職業教育、学

級内のまとまり、普通学級生徒の理解や愛情の深さという観点すべてにK中にて非常にうまくいっていると考え、判断している教師が最も多く、D中では、かなりうまくいっていると考え、判断している教師が最も多く、両校ともに、うまくいっていないとする教師は少なかったが、K中の教師が自分の学級をより高く評価していることが明らかとなった。(7)普通学級生徒と特殊学級生徒との関係は、教師の側からみると、かなり平均化されはするが、普通学級生徒への調査と同じ傾向が見出された。

VI 結果の纏めと討論

始め6校の被調査校から資料を得たが、後半はK中、D中のケース・スタディ的な研究となった。そのK中とD中とは客観的な相違点(開設の動機や歴史など)が見られるが、少なくとも、普通学級生徒及び教師の側から次のことが言えるであろう。

特殊学級が「うまくいっている」ということと、接触の如何にかかわらず、普通学級生徒が好意的態度をもっているということ、及び、教師も特殊学級に関心を寄せ、存在の意義を認め、その学級の生徒をも共に指導していこうという構えをもっていることとは並行しており、その逆も成り立つということである。

勿論、ひとつひとつの調査では検討すべき点も多く、また、調査の対象となった学校の特殊性もあり、直ちに一般化することは許されず、今後も種々の条件分析のもとでの調査が必要とされるであろうし、出発点となった教育の効果ということも一時点だけをとり言及すべきものでなく、統制は非常に困難な問題である。

しかし、以上の結果が見出されたということは、国としての精神薄弱者対策も枝を拡げ厚みを増してきた観があり、特殊学級の数も増し、制度上での進歩にも著しいものがあり、同時に内容の充実も見られてきているが、特殊教育をもう少し広い立場から考え、学校全体の中で押し進めていかねばならないことを示していると考えられる。結果は、因果関係を示してはいないが、恐らく、特殊学級とその環境を作りあげているものはお互に働き合っているであろう。器だけでできて、進歩のないこの分野の教育を考えると、改めて、啓蒙の活動が深く浸み込まねばならないことを痛感させられるのである。